

〔ライフスタイル・生活専門委員会〕 発表資料

現代にいかす「江戸のライフスタイル」

神崎宣武

● キーワードは「粋」と「いさぎよさ」

① 「始末」の美学 — なにごともほどほどに

江戸時代、モノの生産は、もともと循環することを前提になされており、古物を扱う商売の発達をみた。古着屋・紙屑買・古道具屋・古がね買・蠟買・樽買・古傘買などである。ちなみに、享保3（1718）年には、江戸市中に485人の古がね買が回っていた、という。

排泄物も、家畜のものまで含めてほとんどが肥料としてリサイクルされた。江戸では寛永期（1624～44年）のころから、武家屋敷だけでなく町屋や長屋までの尿の個別買いが行なわれるようになった。たとえば、江戸中期、「町肥^{まちひ}」は、馬の背に二桶をつけた一駄を単位とし、1ヵ月30駄、1年360駄で6両が買い取り相場であった、という。「きんぱん」とよばれる山の手のものは8両から10両、長屋のそれは、だいたい3両から5両ぐらいで、大家はこの尿尿代で正月の餅を店子に配った、ともいう。

ゴミ収集のシステムも確立された。慶安2（1649）年、幕府は空き地や川、堀などへのゴミの投棄を禁止し、明暦元（1655）年には、永代島をごみ捨て場に指定。元禄11（1698）年、永代橋を架けて陸送の便をはかった。18世紀になると町のゴミ回収や埋め立てを専門に請け負う業者が出現。その数は70人あまり、という。やがて、町奉行所は「御堀浮芥浚請負人」の株仲間を公認、鑑札を下付した。寛政6（1794）年には、株仲間の数は98人にのぼった、という。幕府は、そこに独占権を与えることで、町の行政を秩序づけ統制をはかったのだ。現代風にいうと、清掃業の委託・民営化にほかならない。その過程において、住民の意見を聞くという制度化の手法は、現代においても学ぶべきところがあるだろう。

② 隠居 — 残照の余白

江戸時代には「隠居」の制度があった。武家の場合は、法令では70歳と定められていた。が、江戸も中期のころになると、「つとめながらの隠居」という方便がとられ、年齢もしだいに引き上げられていった。たとえば、享保年間（1716～1736年）では61歳から64歳であったが、100年後の文化年間（1804～1818年）では52歳から55歳と低くなっている。町人の隠居には年齢の制限はなかったが、

井原西鶴は、『日本永代蔵』で、「二十四、五歳までは親の指図を受け、その後は自分の才覚で稼ぎ、四十五歳まで一生困らないだけの身代^{しんたい}を築き固め、それで遊び楽しむのが理想の生き方ときわまったものである」といっている。家督を譲り仕事の一線を退いたのち、彼らは地域の伝統をつなぐべきしつけ係としての大役を、楽しみのひとつとしてつとめてもいたのである。

隠居と隠遁とは違う。趣味三昧の生活であれ、ある部分で実社会とのつながりをもっていた。なかには、隠居してのち、世に残る仕事を成した人もいる。よく知られるところでは、伊能忠敬である。彼は、17歳で伊能家の養子となり、没落しかけた稼業を再興し、名主として郷土の発展にも貢献した。そして、50歳で隠居。江戸に出て天文学を学び、日本全土の測量を志したのである。72歳までの16年間で地球一周を超える行程を測量し、その全距離を自らの足で歩き通したことは、よく知られるところである。

③ 「心づけ」の心得 — 器量・鷹揚・洒脱

金さばきがよい、といえば、まず江戸っ子。とくに、職人たちは、「宵越しの銭は持たねえ」を信条とした。「金は天下のまわりもの」と、きっぷよくつかい、清貧思想を標榜していた。それを美学とした。そして、江戸の大人たちは、何より若者に対して金遣いのきれいさを体現することが求められた。ひとり金遣いにかぎらず、大人が大人たる姿をみせる。その姿をみて若者たちが育つ。江戸とは、そうした社会制度を成熟させていた時代なのである。

たとえば、心づけは、大人のなすべき配慮であった。それは、廓遊びでもいかになく発揮された。廓遊びとは、大人の器量、鷹揚さ、洒脱といったものを磨き仕上げる場でもあったのだ。それゆえに、それがある格式となり、若い世代があこがれる遊びの世界をつくっていたのである。

④ 「義兄弟」のすすめ — 人恋しさと連帯

江戸時代、家族や親族の信頼も隣組や仲間内の相互扶助も、現在より数段強かった。たとえば、親のない子を地域が育てるということがごく当たり前に行なわれていた。町や村全体がいわば養護施設のような役目を果たしていたのだ。さらに、それに類するところのまた別な信頼関係の制度化もあった。「義兄弟」「義姉妹」がそれを象徴する。それを「兄弟なり」といった。義兄弟は、社縁の関係にある。その意味では同好グループの仲間と同類だが、絆の強さはその比でなく、血縁に等しい。ほかに、名付け親・烏帽子親・出立ち親など擬制的な親子関係もみられた。義兄弟の場合は、精神的な相互扶助の意がつよく、擬制的な親子関係の場合は、扶養と労働の交換という経済的な利害関係のつよいものであった。

⑤ 老入と死光 — 老いも死も「迎えるもの」

江戸時代は、若返りという考え方があまりなかった時代、といわれる。つまり、若いことに価値をおかない。若いころより老いて幸せ、とした。若さより「老い」が尊ばれた時代であった。そのためか、「老後」という言葉がほとんどつかわれていない。それにかわる言葉が「老入^{おい入れ}」。老後を人生の終着点と捉えるのではなく、入り口という捉え方をしたのである。あくまでも前向きであった。そしてまた、あくまでもいさぎよかった。

往生際がよい、悪い、という言葉がある。江戸時代、自然にもたらされる死を淡々と迎えることが、往生際のよいことであった。何しろ、医療未発達^{いりょうみはつた}の時代である。いかにあがこうとも大病となれば死から逃れることはできない。あきらめるしかなかったのである。そして、できるだけ死に際を美しく、と人びとは願った。それを「死光^{しにひかり}」と呼んだ。人生をしめくくる辞世の詩歌を残す者も少なくなかった。そこからは、死を前にしても「自然流^{じねんりゅう}」にこだわる江戸人の姿がみえてくる。

*江戸時代の著名人の死亡年齢

十返舎一九 67歳

「此の世をばどりやお暇^{いとま}に線香の煙とともに灰左様^{はいさよう}なら」

曲亭（滝沢）馬琴 82歳

「世の中のやくをのがれてもとのままかへすはあめとつちの人形」

松尾芭蕉 51歳

井原西鶴 52歳

貝原益軒 85歳

杉田玄白 85歳

葛飾北斎 90歳